

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Valenz理論におけるドイツ語補文構造の位置付けについて
Author(s)	井浦, 伊知郎
Citation	ニダバ, 26 : 21 - 30
Issue Date	1997-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048009">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048009</a>
Right	
Relation	



# Valenz 理論における ドイツ語補文構造の位置付けについて

井 浦 伊知郎

## 0. 序

Valenz理論（以下『結合価理論』と訳す）の立場とは、概略的に言えば、動詞によって支配可能な文成分を規定した上で、それらの成分を結び付ける各動詞の力価ともいうべきもの、またそれと共に文を構成する共演成分（Aktant）を分析し、そこから文の（主に統語論的な）構造を明らかにしようとするものである（註1）。結合価理論はドイツ語学における独自のかつ重要な研究分野の一つであり、特にドイツ語教授法の理論に大きな影響を与えている（註2）。更に今日ドイツ語圏では、外国人に対するドイツ語教授理論だけでなく、ドイツ人に対する他の言語の教授法へも結合価の概念が援用されている。

ところで、結合価の研究においては、動詞と複数個の文成分から成る、比較的単純な文構造が例示されることが多い。しかしより複雑な文、例えば主節と従属節から成る文において、両者の相互関係を結合価理論で説明することも当然できる。また、主に統語論的側面が強調される結合価理論にあっても、意味論的観点の立ち入る余地がなお考えられる。

それでは、ドイツ語におけるより複雑な文構造の分析手法はどの様に説明されるのだろうか。またそうした手法は、他言語の文法を説明する際にどう応用されているのだろうか。これが、今回筆者が抱く問題意識である。

本論文では、まず補文（註3）の構造、特にドイツ語文法で副文（Nebensatz）と呼ばれる文構造が結合価の理論においてどの様に取り扱われているかを概観する。

次に、接続詞節に関連して、相関詞（Korrelat）と呼ばれる文成分の振る舞いを、できるだけ結合価理論に沿って考察する。

最後に、こうした結合価理論の影響を受けた分析の手法が、ドイツ語圏における他言語の文法研究にどう応用されているのかについて、筆者の主たる研究対象である言語の具体例を取り上げ、問題点を指摘する。

## 1. 結合価理論

まず結合価理論の基本的な考え方を見ておこう。序章で述べた様に、同理論は動詞により支配され得る文成分をとるための、各動詞に固有な「能力（Fähigkeit）」が存在する

という前提に立っているが、ここで外国人のための授業用参考書として知られるHelbigとBuschaのドイツ語文法から、より正確な記述を引用する。

"Unter Valenz wird die Fähigkeit der Verben verstanden, bestimmte Leerstellen im Satz zu eröffnen, die besetzt werden müssen bzw. besetzt werden können."

「結合価とは、特定の文肢（文成分）によって占められねばならない、あるいは占められる一定数の空白位置を作り出す動詞の特性のことである」（Helbig/ Buscha 1991, S. 66-67, S. 620）

動詞はその結合価によって(1)から(3)の文成分をとることができる。補足成分は文構造において義務的または準義務的であり、添加成分はまったく随意的である。補足成分と添加成分の識別条件は原則的に文脈に依存しないが、二種の補足成分の分類は多くの場合で文脈に依存する（Helbig/ Buscha 1991, S. 619-620）（註4）。

(1)義務的補足成分 (obligatorischer Aktant)

Er legt das Buch *auf den Tisch*. 「彼は本を机の上に置く」（削除不可）

(2)任意的補足成分 (fakultativer Aktant)

Er steigt *in die Straßenbahn* ein. 「彼は市電に乗り込む」（削除可）

(3)添加成分 (freie Angabe)

Er arbeitete *in Dresden*. 「彼はドレスデンで働いていた」（結合価に依存しない）

## 2. 結合価理論におけるドイツ語補文構造の捉え方

次に、補文構造の結合価理論による解釈を見ることにする。補文の種類には、補部が文主語となる場合や、副詞的規定句 (Adverbialbestimmung) となっている場合などがあるが、本論文ではもっとも理解し易い例として、目的語補文（より正確には主要部動詞の直接目的語としての）を取り扱う。

### 2.1. 目的語補文

目的語補文は主要部動詞の目的語の位置を埋める形で、*W*-疑問代名詞や接続詞*ob*、そして*daß*によって導入される（Helbig/ Buscha 1991, S. 671）。

Er begreift (es), daß er einen Fehler gemacht hat.

(←Er begreift seinen Fehler.)

「彼は自分のしくじりに気付く」

ここで注意すべきことは、*daß*-補文節が *begreifen* の事実上の目的語であるにも関わらず、主要部に目的語代名詞*es*が置かれ得る点である。この様な*es*を相関詞と呼ぶが、この相関詞の振る舞いは、補文構造と文全体との関連を見る上で重要な要素と思われる。

## 2.2. 補文と相関詞の相互関係

そこで、本節でドイツ語の *daß* 補文（または不定詞補文）の統語的な記述時における相関詞の性質について考察する。まず相関詞の代表的な定義を引用しておこう。

"Alle Nebensätze...werden als nähere Bestimmung zu einem Wort im übergeordneten Satz betrachtet. Die Nebensätze haben im übergeordneten Satz ein Korrelat, auch wenn dieses Korrelat im konkreten Satz nicht mehr auftritt."

「副文はすべて…上位文の特定の表現要素を限定するものである。この限定される表現要素を相関詞と呼ぶ。相関詞は、具体的表層文に現れないこともあるが、抽象的な基底構造のレベルでは常に上位文に存在している」(Helbig/Buscha 1991, S. 670) (註5)

この様に、基底構造において相関詞は常に存在し、条件に応じて削除されると見なされている。また相関詞と補文の相互関係は、次に示されている様に、付加語 (Attribut) とそれによって限定・修飾される語の関係にある。

"Alle Nebensätze sind Hinzufügungen zu einem entsprechenden Korrelat; sie können als Attributsätze im weiteren Sinne des Wortes angesehen werden. Die verschiedenen Bedeutungen der NS werden durch die Korrelate im übergeordneten Satz und die Einleitungswörter der NS deutlich."

「副文はすべて、上位文の中の相関詞に対して、付加語的關係に立つ。したがってこれらは広い意味において付加語文と見ることができる。主文に対する副文の様々な意味関係は、主文の相関詞と副文の導入語が表わす」(Helbig/Buscha 1991, S. 670)

相関詞は次の様な役割で用いられる（統語論的には『具体的表層文 (konkreter Satz) に現れる』と見なされる）。

(1) 意味の希薄な接続詞 *daß* において、主文と副文の意味関係を明確にする。

*Auf Grune der Tatsache, daß er krank war, wurde er von der Prüfung befreit.*

「病気があったため、彼は試験を免除された」

(2) 一定の格（前置詞格を含む）を支配するある種の動詞および形容詞。

*Ich verlasse mich darauf, daß du mir hilfst.*

「私は君の助けをあてにしている」

*Ich bin es überdrüssig, daß er immer zu spät kommt.*

「彼がいつも遅れて来るので、私はうんざりしている」(註6)

ここで問題とするのは、(2)にあげた *darauf* や *es*、特に目的語代名詞 *es* の働きである。これらには、義務的な成分として現れる場合と、任意的なそれとして現れる場合があるが、上述の場合は義務的である。

義務的な相関詞には、es aufgeben, darauf bestehen, daran gehen など、任意的なものには(es) jemanden auftragen, (es) bedauern, (es) befürworten, (daran) zweifelnなどがある。これらは定動詞の意味により決まる (Helbig/ Buscha 1991, S.110)。

### 3. ドイツ語圏の外国語文法における結合価理論

それでは、こうした結合価理論の手法や補文構造に関する考え方(総じて、ドイツ語学的な考え方と言うこともできよう)が、他の言語の文法を習得・研究する過程でどの様に反映されているかについて、本章で見ておこう。言うまでもなくドイツは結合価理論の本拠地であり、ドイツ語圏における様々な言語の専門家が、文法の教授法に関連して結合価理論を多かれ少なかれ意識している(註7)。結合価理論を積極的に取り入れた説明にもとづいた文法書も作られている。本章では、まずドイツ人によって書かれたルーマニア語文法の例を簡単に紹介し、次に筆者の主な研究対象であるアルバニア語の例を詳しく説明する。

#### 3.1. ルーマニア語文法における結合価理論

ドイツ人によって書かれたルーマニア語文法で、動詞の結合価がどの様に説明されているか、最も詳細な文法書の「動詞」の章から一般的説明の一部を引用する。

"Als Valenzträger treten die Verben nicht nur als Satzglied auf, sondern bestimmen die syntaktische Struktur des Satzes weitgehend."

「結合価の担い手としての動詞は、文成分として振る舞うのみでなく、文の統語構造をも規定し得る」(Beyrer/ Bochmann/ Bronsert 1987, S.146)

"Die Valenz des Verbs bestimmt, welche obligatorischen und welche fakultativen Satzglieder im Satze enthalten sind. Die weitgehend eindeutige Angabe von Person und Numerus durch Flexionsmorpheme, die im Normalfall die Setzung des Personalpronomens als Subjekt überflüssig macht, bringt die Existenz von ihrer Valenz nach nullwertigen Verben im Rum. mit sich..."

「動詞の結合価は、文がどの様な義務的、任意的な文成分をとり得るかを規定する。動詞の屈折素によって特定される人称・数の成分があるため、人称代名詞の主語を置くのは通常過剰であり、ルーマニア語の0価動詞における結合価の存在は動詞それ自体によって表わされる」(Beyrer/ Bochmann/ Bronsert 1987, S.146)

ここで述べられている0価動詞の例として、plouă "es regnet" やninge "es scheint" などがある。いずれも非人称動詞の例である。

一方、前章で考察した補文と相関詞の問題は、ルーマニア語文法でどの様に説明されて





E shohim të arsyeshme të shkojmë atje.  
 OZ 3. sg. akk. sehen-pl. 1 ratsam-f. sg. akk. gehen-konj. pl. 1 dort  
 "Wir betrachten es als ratsam, dorthin zu gehen."  
 「我々はそこへ行くのが得策だと思う」

ドイツ語の daßに相当する接続詞はse (またはqë) であるが、これを用いた補文の構造には、ドイツ語のそれに類似し、なおかつそれ以上に興味深い現象が見られる。

Unë e dija se do të votohet.  
 ich OZ 3. sg. akk. wissen-impf. sg. 1 verspäten-fut. refl. sg. 3  
 "Ich wußte (es), daß er zu spät kommen wird."  
 「私は、彼が遅れて来ることを知っていた」

Të gjithë e kuptuan se është gënjeshtar.  
 alle OZ 3. sg. akk. verstehen-aor. pl. 3 sein-sg. 3 Lügner-bst. sg. nom.  
 "Alle haben (es) gemerkt, daß er ein Lügner ist."  
 「誰もが、彼が嘘つきであることに気付いた」

ここで、目的語標識 eは前章におけるドイツ語の相関詞esと似た統語的機能を持っていると考えられる。だがドイツ語訳においてesが任意的な補足成分であるのに対し、上の二つの例文から eを削除することはできない。これは、補文が主要部動詞に対して直接目的語の位置にあり、補文に示された内容が既知の事柄として表わされている場合、要するに文の主題 (Thema) である場合に起こることである。

一方次の様な場合は、ドイツ語の相関詞が現れないのと同様、補文標識に一致する目的語標識 eは現れない。

A do të më tregojnë mua zanat  
 (Fragepartikel) OZ 1. sg. akk. zeigen-fut. pl. 3 mich Geist-bst. pl. nom.  
 se ku e kanë fuqinë?  
 wo OZ 3. sg. akk. haben-pl. 3 Kraft-bst. sg. akk.  
 "Werden die Waldelfen mir denn zeigen, wo sie ihre Kraft haben?"  
 「森の妖精達は、彼らの力がどこにあるかを私に教えてくれるだろうか？」

Ai vendosi të marrë masa të rrepta kundër tyre.  
 er beschließen-aor. sg. 3 machen-konj. sg. 3 Maßnahme streng gegen sie  
 "Er beschloß, strenge Maßnahmen gegen sie zu ergreifen."  
 「彼は、彼らに対して強硬な措置をとることを決めた」

この場合、先程とちょうど逆のことが言える。すなわち、補文または動詞句 (Verbal-konstruktion) が主要部動詞に対して直接目的語の位置にあり、補文に示された文内容が既知の事柄として表わされていない、または未知の事柄として表わされている場合、相関詞としての目的語標識は決して現れないのである。これを題述 (Rhema) と見なしても、ほぼ例に当てはまるであろう (Buchholz/ Fiedler 1987, S. 442-443)。

以上の点を踏まえて、最後に、結合価理論がアルバニア語に適用される際の問題点を整理しておこう。

補文構造の分析においては、主要部に置かれた動詞が持つ固有の性質によって、弱形人称代名詞 (目的語標識) が義務的または任意的な相関詞として要求されている、ということはもちろん考えられる。この場合、ドイツ語の場合と同じ様に考えれば、抽象的なレベルでは目的語標識が常に存在するが、表層においては削除されることがある、ということもできよう。

しかし、バルカン半島の諸言語、特にアルバニア語の場合、それぞれの動詞に固有の意味 (文脈から切り離された形で持つ動詞の特性) による以外に、それ以外の意味的相違によっても目的語標識の選択 (主要部に現れるか否か) が決まっているのではないか、ということも考えられる (註10)。ドイツ語の表層文に相関詞が現れる必須条件として2.2.で挙げた「主文と副文の意味関係を明確にする」ことも、広い意味でこうした事柄に含まれるだろう。このことは、補文に対してさえ、主要部内で目的語の重叙という現象を頻繁に起こすアルバニア語動詞へ結合価理論を適用する際、充分留意されるべき点と言える。

これらの重叙表現は一見すると結合価理論からの逸脱の様であるが、この様な表現を生じる言語にあってはどちらかという動詞の (主に統語上の) 必須成分として文構造の中核部を形成している傾向さえ見られるのである。「一定の格を支配する」という動詞の文成分に対する枠組みがドイツ語以上に明確に表層文に現れている、という風にも見えるが、この点についてはなお具体的な検討が必要である。

また、こうした仕組みは各動詞がとり得る文成分を正確に把握しなければ理解できず、それ故、結合価の概念による理解がむしろ重要なのであり、そこにバルカン諸言語で結合価理論が適用され易い (Buchholz/ Fiedler 1982) 事情もあると考えられる。

こうした特徴を持つ他言語への適切な応用という立場からも、ドイツ語の動詞結合価理論における補文と、それに対応する相関詞の位置付けの問題が、今後更に掘り下げられるべきであろう。

## 註

(1) 統語構造を捉える結合価理論において「意味」の問題を考える際、「焦点の問題」を取り上げる立場がある。ただしこの場合の「焦点」とは話者の判断などに依存するものではなく、むしろ動詞本来の機能として考えられている。

「確かに典型的な対格目的語には『強い影響を被る対象を表示する』という特徴が見られる場合が多いようですが、その根底にはさらに抽象的な対格目的語の特性があるように思えます。私は、それぞれの動詞に固有な『事柄の捉え方』というものがあり、その『捉え方』において『注目の焦点』になる項が対格目的語になると考えています…

…言語学で『焦点』と言えば、一定の文脈において、話し手が聞き手にどのように情報を伝達するかという『テーマ・レーマ』のレベルで、文アクセントが置かれる新情報の焦点を指すことが多いようですが、意味分析などではこれとは別の意味で『焦点』という用語が用いられています…

…補足成分の形態との関連で重要なのは、ある事柄を表すときに、その事柄に関与する項のどれに注目してその事項を描くかということ、あるいは特定の項に注目するか、事柄の中核である動作そのものに注目するかということです…これは発話場面における話し手の行為ではなく、動詞に固有な『意味』の一面だと考えています」(成田1994 p.116-117)

(2)結合価理論の歴史(特にL. Tesnièreを出発点としてH. Brinkmann, J. Erben, W. Admoniらによる理論的發展)や語学教育に対する応用理論については、本文中で引用したHelbigとBuschaの文法、またHelbigとSchenkelによる結合価理論の具体的な手引きとして製作された辞典類(特にHelbig/ Schenkel 1991, S. 11-76)を参照のこと。

(3)補文(complement sentence)は本来変形文法(特にPeter S. Rosenbaum)の用語である。NP、またはVPの内部に埋め込まれたS(embedded sentence)のことを指し、句範疇内における主要部(X構造における $X^0$ )の種類によって、名詞句補文、動詞句補文、形容詞句補文に分類される(稲田1989, p.29-112)。伝統的に言うところのthat節や不定詞節に呼応する部分もある(Quirk/ Greenbaum/ Leech/ Svartvik 1991, p.342-345, p.727-743)が、必ずしも一致しない。もちろん関係代名詞節も補文に含まれるが、本稿で扱う補文は、こうした変形文法の用語として厳密に分類されているものではなく、主に接続詞(英語のthatやドイツ語のdaß)を補文標識として導入される節を指している。

(4)義務的補足成分と任意的補足成分、更にこれらと添加成分の区分は、今日なお議論の分かれるところであり、本文に引用した様な簡潔な表現では対応できない逸脱的事例が存在することも事実である(Helbig/ Buscha 1991, S.352-353, S.619-620 及び在間1995)。しかし本稿は補文構造との関連を探るのが主目的であり、文中で特にことわらない限り、ひとまずHelbigやBuscha、及びSchenkelらによる基本的な概念の定義(Helbig/ Schenkel 1991, S.12-24)に沿って話を進める。

(5)広い意味での相関詞には、so~ daß…の句におけるsoなども含まれる。

Der Beifall war so stark, daß das Stück wiederholt werden mußte.

「拍手は曲をもう一度繰り返さなければならぬほど盛んだった」

もちろん daßその他と組み合わせられるsoが常に相関詞にあたるわけではなく、次の様な例のsoは、接続詞句の一部を成すに過ぎない。(Helbig/ Buscha 1991, S.446)

Der Beifall war sehr stark, so daß das Stück wiederholt werden mußte.

「拍手が非常に多かったので、曲をもう一度繰り返さなければならなかった」

(6)ただしüberdrüssigが対格をとることは稀で、普通は次の様に属格をとる方が多い。

Sie wurde des Alleinseins überdrüssig. 「彼女は孤独に耐えられなくなった」

(7)本稿では取り上げる余裕がないが、近年ドイツでは、HelbigやSchenkel以来の結合価理論に大規模な修正を加える見解、或いは結合価や文成分を規定する方法論そのものに否定的立場をとる研究が幾つか出されている（在間1995）。

(8)ここで再度「ドイツ語圏」と限定しておくのは、意味のないことではない。というのは、アルバニア語圏におけるアルバニア語（つまり母語）の言語学的研究において、結合価の理論が言及された例は、まったくと言っていい程見当たらないからである。

(9)バルカン諸語に見られる重叙代名詞に対して、英語圏で出された文法書では redundant や pleonastic という表現がしばしば見られるが、こうした表現で重叙現象全体を示すことは、ドイツ語圏では既に行われなくなっている。特にアルバニア語では、本文の様に限定された慣用表現の場合にしか pleonastisch とは言わない。

(10)アルバニア語の補文導入時に主要部動詞（または名詞、形容詞）固有の意味、更に文脈との関連で補文標識が選択されている可能性については、拙稿「アルバニア語に於ける2種類の補文構造の意味論的研究」（『ニダバ』24, p.86-95）、及び筆者の修士論文「アルバニア語の se, që を用いた2種の補文構造の意味論的研究」を参照のこと。この中では、主要部に現れる目的語標識の問題も指摘されている。

## 参考文献

- Beyrer, Arthur/ Bochmann, Klaus/ Bronsert, Siegfried (1987): *Grammatik der rumänischen Sprache der Gegenwart*. Leipzig (Verlag Enzyklopädie)
- Buchholz, Oda/ Fiedler, Wilfried (1982): Probleme des Vergleichs von Satzmodellen des Albanischen und Deutschen. *Zeitschrift für Phonetik* 35/4, 383-391
- Buchholz, Oda/ Fiedler, Wilfried (1987): *Albanische Grammatik*. Leipzig
- Helbig, Gerhard/ Buscha, Joachim (1991): *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. 13. Aufl. Leipzig (Verlag Enzyklopädie)
- Helbig, Gerhard/ Schenkel, Wolfgang (1991): *Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben*. 8. Aufl. Tübingen (Max Niemeyer)
- Quirk, Randolph/ Greenbaum, Sidney/ Leech, Geoffrey/ Svartvik, Jan (1991): *A Grammar of Contemporary English*. London (Longman)
- 稲田俊明(1989): 『補文の構造』 東京(大修館書店)
- 在間進(1995): 「ドイツ語における結合価研究の功罪」 『言語』3, 60-67
- 成田節(1994): 「ドイツ語動詞の結合価と文の意味」 『言語』10, 115-118